



ヨイマチ ワズライ

Adult Only



秋の寒風が入り口の暖簾を揺らす。布団の誘惑は日毎強まり、朝晩の冷え込みはストーブを恋しくさせるばかりだ。

「……はあ」

里の貸本屋『鈴奈庵』。〃万本取扱^{よろずほんとりあつかひます}〃の看板を掲げたカウンターに突つ伏して、本居小鈴は今日十何度目かになる溜息をついた。頬をぐりぐりと卓に押し付けたままちらりと視線だけ入り口を窺い、人の気配がないことを確認してつまらなそうに眼を閉じる。左右に括った栗毛の髪に止められた鈴飾りが、りと音を立てた。

傍らの蓄音機は、先程からレコードを空転させ、同じところをぐるぐると回る針が規則正しいノイズを刻んでいた。

掃除も途中で放り出し、先月の貸出目録の整理も済んでいない。店番がこの有様ではよろしくないと分かっている、どうにも気持ち定まらない。

「……………」

まだ陽は高い。あの人が来店するのは大抵が夕方だ。分かっている、視線はどうしても入口を向いてしまう。気晴らしに新入荷の本でも眺めていようと、傍らのハードカバーに手を伸ばすものの、表紙を捲ったあたりでそんな気分は萎えてしまった。

「……はあ……」

ぱたりと表紙を閉じ、カウンターに頬杖を突く。

……いつからだだろう。『あの人』の姿が頭から離れなくなってしまったのは。

客のまばらなカウンターで店番をしている間も。

黄蘗色のエプロンに袖を通して、店の入り口を掃いている間も。気付けば視界の中に、彼女の姿を探していた。

——そういえば、名前を聞いたことがないんだと気付いたのはつい先日。丸に一つ瓢の羽織りと丸眼鏡、葉っぱの髪留めがトレードマークの彼女は、〃ニッ岩明神〃の通り名で知られ、里でも名の通った金貸しであるのだそう。

ほんの一年前、ふらりと現れた彼女は、あつという間に里に溶け込んだ。およそ金貸しと言えどかく悪い噂が付いて回る商いだ、ニッ岩明神に限ってそれはなく、明朗会計、勤勉実直、実に誠実なものと評判だ。

いまやその商売は金貸し両替に留まらずに手広く、堆肥の製造販売、小豆相場、造り酒屋、今年流行の着物柄、傾いた商家の経営指南にまで及び、時には土地の境界争いの仲裁などにも顔を出す。長く懸案だった鏝銭は正にも奔走したことで同業者からも慕われ、生活に困るものには無利子で返済期限も設けないこともあるというから、よほどのものであろう。

かくしてニッ岩明神の名は里の外まで広く知られ、その見識の深さ、度量の広さを買われて、本業以外でもあちこちで最員にされていた。

彼女はまた外来の知識にも通じ、鈴奈庵で取り扱う外来本や妖魔本にも造詣が深い。小鈴も常連となった彼女に何度となくの世話になっていた。

「……………」

そんなニッ岩明神の存在が、いつの間にか自分の中で大きくなっていた事に気付いたのは、いつ頃からだったろうか。

私家版百鬼夜行絵巻や面霊鬼の騒動を見事な手腕で納めた彼女に、憧れめいた想いを抱いていたのは確かだ。これまでも博麗神社の巫女や森の魔法使いが異変を解決するのは見てきたけれど、ニッ岩明神へ抱く思いは、同年代ということで親しみのある霊夢達に対する感情とは明らかに違っていた。

「明神さん……」

くいと眼鏡を押さえて真剣に外来本の品定めをする眼差し。落ち着いた物腰と広い見識に似合う、ちよつと不思議な喋り方。時折見せる眼鏡越しの悪戯っぽい笑み。

気付けば、憧れのあの人の姿が、いくつも小鈴の胸に強く焼き付いている。接客中にふと顔が近いのに気付き、ときめく胸を押さえて慌ててしまったことも何度かあった。

「……今日は、来てくれるかな」

一日はこんなにも長いものだったろうか。

——邪魔するよ、と。

聞き覚えのあるあの声が、暖簾を押し上げて入ってくるのを、焦がれて過ごす手持ち無沙汰の時間。じれったいほどに進まない時計の針を眺めて、小鈴はもう一度吐息した。

「こんにちは」

来客を知らせる鈴が鳴る。物思いに耽っていた小鈴が、がばと身を起せば、そこに居たのは別の意味で見慣れた顔だった。

「……なんだ、あんたか」

「挨拶ねえ」

やってきたのは稗田阿求。一度見聞きしたことを忘れないという、ちよつと難儀な能力を持つ小鈴の友人である。

里の歴史を預かる里の重鎮、稗田家の当主、九代目御阿礼の子という仰々しい肩書に、まるで生き神様のように崇めている老人もいるが——小鈴にしてみれば寺子屋で机を並べて学び、揃って慧音先生の頭突きを頂戴した仲。飾ることなく本音で話せる友人の一人だった。

阿求——と言うよりも稗田家は鈴奈庵のお得意様でもある。幻想郷縁起の出版も鈴奈庵を通じて行われており、家族ぐるみの付き合いもあった。

重い腰を上げてお茶を用意し、小鈴は彼女を出迎える。

「返却？」

「ええ。これ、この前の本。新しい入荷はどんな感じ？ 随筆とかあったら借りていきたいんだけど」

「ん——……こんなとこかな」

礼儀正しく向かいの椅子に腰かける阿求に、やる気なげに新入荷分の書籍の目録を示し、小鈴は再度溜息をついた。

「どうしたの？ 随分落ち込んでるみたいだけど」

「……そう？」

「どうみてもね。聞いて欲しいって顔に書いてあるわ」

「むっ」

看板娘がそんなことでいいのかしら、と阿求。小鈴はちよつと不満げに、自分の頬をぐにぐにと引っ張る。

さて、阿求にまで言われるのだからよっぽどなのだろう。目下の問題はわかっているものの、話すべきか躊躇われた。こういった繊細な乙女心の相談相手に、このいかにも箱入りでおぼこい友

人が頼りになるのかという疑念が湧く。

加えて、阿求は一度聞いたことを忘れない能力の持ち主、迂闊に話して良いものだろうかという危惧もあった。阿求がお茶を啜っている間、しばし一人で思い悩み——やがて小鈴はゆつくりと重い口を開いた。

「ねえ、阿求って誰かを好きになったこと、ある？」

盛大にお茶を噴かれた。

「……話すんじゃないかった」

「ごめんごめん、ちよつと唐突だったものだから」

不貞腐れてそっぽを向く小鈴に、慌ててフオローに入る阿求。だが、その口元がにやけているのを小鈴は見逃さなかった。まったくもって失礼な話である。

「小鈴も隅に置けないのねえ」

「なによ、お姉さんぶっちゃって」

「うふふ」

くすくす笑う阿求に、抗議の意味を込めてぶくりと頬を膨らませてみせる。

……とは言え、考えてみれば御阿礼の子として転生を繰り返す阿求の人生経験は見た目通りとは言い難い。前世の記憶全部を覚えていた訳ではないと阿求自身も語ってはいるが、少なくとも小鈴よりはお姉さんなのだ。

「で、お相手は誰なの？」

ずずいと顔を寄せ、好奇心いっぱい目で聞いてくる阿求。もはや乙女というよりも噂好きのおばちゃんの体である。どう見ても引きさがる気配のなさそうな彼女に、今さら言葉を引きつめることもできず、小鈴は渋々と応じる。

「……二ツ岩明神さん」

告げた名前に阿求はしばし、なんのことも分からないいうように瞬きをして、しばし上を向いて額を押さえた後に、何事かをぶつぶつと呟いてから、眉を潜めて言ってきた。

「……本気なの？」

「いいじゃないつ、格好良かったんだから！」

なんだか自分自身まで否定されたみたいで、小鈴は机を叩いて叫んでいた。思わず椅子を鳴らして立ち上がる。

まあ、もしかしたらそんな反応をされるんじゃないかとは思っていたけど、それにしたって阿求の物言いはちゃんときた。

「でもねえ……。二ツ岩明神さんでしょう？」

それでも阿求は何やら複雑な表情で念を押してくる。小鈴の知る限り、彼女の商売には悪い噂を聞かないはずなのに、一体何がいけないのかと流石に小鈴も首を傾げる。

「なにか悪い噂でもあるの？」

問われ、阿求は言い辛そうに言葉を選びながら、

「そうね。商売のほうはそうかもしれないけど、明神さん本人はあまりいい噂を聞かないのよ。」

……遊郭通いが絶えない、とかね」



秋も深まり、日暮れはやたらと早くなった。里の通りもそろそろ夕に沈もうと言う時刻。そこらでは気の早い飲兵衛が乾杯の音頭を上げている。

小鈴は集金と返却本を収めた鞆を抱え、足早に自宅への道を急

いでいた。

貸本屋という、ぎつしり並んだ書架のイメージから、いつも店内でお客を待っている静かな商売と思われがちだが、どっこい古書の扱いというのなかなかの重労働。書籍の上げ下ろしは力仕事で、身体が資本である。貸本という商売柄、こうして遅くまで集金や延滞本の回収に走り回るのも良くあることだ。

しかし、小鈴の胸を占めているのは、昼の友人との会話だった。

「阿求つたら、変な事ばかり言うんだから」

憤懣を露わにするように、膨らんだ小鈴の髪で飾り鈴がりりんと跳ねる。

「……だいたい、明神さんだって女の人じゃない。なんで遊郭なんかに行かなきゃいけないのよ」

かく言う自分も女の子じゃないのかとか、そのあたりはこの際置いておくことにする。

時間が経つにつれ、不満は怒りに変わっていた。どこの噂か知らないけれど、あんな水を差すようなことを言うなんて。いくら阿求の言うことでも——否、阿求の言葉だからこそ、どうにも納得いかずに、自然に頬が膨らむ。いくら良い商売をしているからと言って、里に古くからある店からは反発されてしまうものなのだろうか。

「阿求だってお世話になつてゐるのに、あんな言い方——」

なおも治まらない憤りを口にして歩く、傾く夕陽の朱の中。影法師のように揺らめく街並みに、ふと、視界の端を見覚えのある背中が通り過ぎた。

「あ」

格子模様の襟巻、丸に一つ瓢の羽織から除く波濤文の袖。

煙管片手に通りを歩く姿は、見間違えようはずもない。

「二ッ岩さ——」

想い人の姿に慌てて足を止め、顔を輝かせた小鈴が大きく手を振って、声をかけようとしたその時。

ふいに二ッ岩明神が顔を上げた。彼女の視線の先、近くの小路から着飾った娘達が駆け寄っていく。

紅白と金銀に鮮やかな前帯の打掛けは、襟元を大胆に開けた扇情的な着こなし。艶やかな髪を結いあげ、眉を整え口元に紅を引いた、夜の街の装いだった。

娘達は立ち止まった二ッ岩明神を取り囲むようにしてその襟元を引き、きやいきやいと身を寄せ、愉しそうに喋りはじめる。よく見れば小鈴とそう変わらない年齢の娘も混じっているようだった。

どうやら、彼女達は二ッ岩明神を店へと誘っているらしい。

「……………」

二ッ岩明神自身も満更ではなさそうで、笑顔で娘たちに応じていた。顔見知りも含まれているようで、袖を引き身を擦り寄せる娘の一人の腰にそっと手を回す。太鼓持ちの男がそれをにこやかに囁し立て、娘達がどっと沸いた。

(明神、さん……)

ざわざわと、小鈴の胸が言い知れぬ不安にざわめく。立ち止まったまま、胸中で案じる小鈴の願いもむなしく、明神はぼりぼりと頭の後ろを掻いて、煙管から大きく煙を吐き出す。

それで話はまとまったようだった。

彼女達に手を取られるまま、二ッ岩明神の姿は、夕闇の中にぼつぼつと灯りの灯り始めた路地の先——宵町の門の向こうへと消

えてゆく。

「あ……」

一人その場に立ち尽くし、小鈴は行き場のなくした手を宙ぶらりんにして、その背中を見送るしか出来なかった。



翌朝。

「ふわあ……」

カウンターの突っ伏しての大欠伸と共に目を擦り、押し寄せる眠気を濃いお茶で誤魔化して、小鈴は睡魔と闘いながら店番をしていた。こんな日に限ってやることもなく、油断すると椅子にもたれてこくりこくりと舟を漕いでしまいそうになる。

結局、昨日はほとんど眠れていなかった。読書に夢中になって徹夜なんてこともないではなかったけど、悶々と眠れずに過したせいのか疲れ具合はその比ではない。

……寝付けないまま、空が白むまで寢床で何をしていたのかというの口が裂けても言えないことでもあるけれど。

「あふ……」

まだお昼にも届かないというのに。あくびをかみ殺して、醒めかけた渋いお茶を啜り、小鈴はその苦みに顔をしかめる。

阿求の言っていたことは正しかった。二ッ岩明神は宵町でも馴染みの顔であり、あちこちの店で太夫とも浮名を流しているという。どうにかして見間違いであって欲しかったけれど、そうではなかったのだ。

「……宵町かあ……」

宵町、三条小路は里の大通りの突き当りにある歓楽街の通称だ。飲み屋やバーの並ぶ表通りとも違い、遊郭の立ち並ぶ入り組んだ袋小路であり、門を潜れば艶やかな別世界が広がっている。特に少女の出入りは制限されていた。建前は青少年への教育への配慮というのだが、借金のカタに身売りされた娘もいるため、足抜けを防ぐために見張られているのだ。昔ほど無茶な事はされなくなったと言うものの、やはりそこは自由とは縁遠い苦界である。

とかく色々と持て余した男達が、欲望の為身を潜めて通うそこは、嫁入り前の娘が話題にするような場所ではない。少年たちにとつてここに行く事は憧れのひとつであり、大人の仲間入りの証でもある。寺子屋でいきがっている少年達は、年上の悪友に連れられていったという先輩の自慢話をするのが常だった。

多く、その後慧音先生に見つかって、健全な交際をするようにお説教を喰らっていたりもしたが。

「うー……」

そんな場所に、二ッ岩明神が入っていったのだ。いくら考えてもその事実は冷静には受け止めきれず、小鈴はじりじりと焦る気分を持て余し、唸り声と共に眉をよじる。落ち着いて考えようにも、寝不足の頭は火照って、上手く思考がまとまらなかった。

(……商談とか、取引がまとまったとかで呼ばれたのかな。ああいう場所でお話するくらいならあつてもおかしくないし、商売の話なら、二ッ岩明神さんだつて断れないよね)

都合のいい理屈をつけて納得をしようとしても、昨日のアレはとてもそんなものに見えなかったという事実が頭から離れない。二ッ岩明神を誘っていた娘たちがどんな仕事をしているのかは、

小鈴だつて分かるのだ。

空になった湯飲みを見、お茶を淹れ直そうと椅子を引いた時。
りん、と来客を告げる鈴が鳴った。

「邪魔するぞい」

「あ——」

にこにこ、暖簾を押し上げて顔を覗かせたのはまさにその当人であつた。小鈴は慌てて立ち上がり、来店した二ッ岩明神の元へと駆け寄る。

「——いらつしやいませ！」

「おう、今日も元氣じゃな、嬢ちゃん」

「はいっ」

穏やかな声に、懊悩などまたたくまに吹き飛んでいた。大きく頷く小鈴の髪で、りりんと飾り鈴が鳴る。主人に再会した仔犬の尻尾のように、結わえられた髪が揺れた。

結構結構と頷いて、二ッ岩明神は話を切り出した。

「嬢ちゃん、ちと尋ねるが、長政の水墨はないかの」

「長政——明野長政ですか？」

「うむ。どうにも面倒な話なんじやが、知り合いがちよいと下手を踏んでの。酒の席で氣が大きゅうなつて、商売仲間の前で秘蔵の長政の掛け軸を披露してやると大見栄切つたはいいが、実物の心当たりなんぞないという体たらくでの。なんとかならんかと泣き付かれてしまつてほんと困つてなあ」

「はい、それなら心当たりがありますっ」

ぐつと拳を握つた小鈴はカウンターを回り、店の奥の蔵書から数冊を引っ張り出してきた。鈴奈庵は貸本屋であるが、写本や製本も行っている。十分な価格を支払えるものになら古書として販

売もしていた。

「……これなんてどうでしょうかっ」

「おう、そんなにあるのかい。いや流石じゃな、光信の百鬼夜行絵巻が私家版まで揃つておるくらいじゃからと思つておつたが」

抱えてきた十冊ばかりを目にした二ッ岩明神の称賛を受け、小鈴はちよつと誇らしい気持ちになつた。彼女の眼鏡にかなう本を扱えるのは、幻想郷広しといえどもそう多くないはずだ。

「どれ」

勢い込んでカウンターに広げた画書の上、二ッ岩明神は眼鏡を押し上げ覗き込んでくる。彼女の顔が間近に迫つて、ふと小鈴が熱くなる頬を自覚した瞬間——

（あ……）

ふわり、と鼻を掠める甘い香りがあつた。

白梅香——髪油に使われる香だ。普段、彼女がこんなものを付けていることは見たことがない。二ッ岩明神は煙草呑みで、香などはあまり好まないはずであつた。

なによりも。白梅香は多く宵町で芸妓などが好む、夜の街の匂いである。

「ふむ、成程。こちらが良さそうかの」

「……………」

丹念に画書を目利きする二ッ岩明神の隣で、小鈴はふと気づいてしまつた。二ッ岩明神が鈴奈庵にやつてくるのは、そのほとんどが夕方だつた。それなのに今日に限つて、どうしてこんなにも早く、店を訪れたのだろうか？

あの人、遊郭でも有名なのよ——？

阿求の言葉が、遊女たちと共に宵町の門の向こうに消えていつ

たニッ岩明神の姿が、続けて脳裏をよぎる。

考えるまでもない。あのあと、遊郭で一晩を明かしたその足で、彼女はそのままここにやって来たのだ。

夜の街で一晩を過ごす。小鈴だつてそれが何を意味しているかくらいは知っている。その相手は一体誰なのだろう。あの娘達の中の誰か、名を馳せる太夫か、それとも——一人ではないのだろうか？ この人はそこで、自分の知らない顔を、見ず知らずの相手に向けているのだ。

そう考えると、小鈴の胸はちくりと痛む。

(……………)

小さく唇を噛み、そつと胸を押さえた小鈴に、ニッ岩明神が声をかけた。

「どうしたのかの？」

「え。あ!? い、いえ、なんでもっ」

「ふむ。……こいつとこいつを頂けるかの。一枚で良いと思つておつたが、甲乙つけ難い。嬢ちゃんは商売上手じゃなあ」

「は、はいっ」

褒められたはずなのに上の空。一度意識してしまえば、もう気にせずにいることはできなかった。動揺を押し隠すことができず紙袋を二度ほどダメにし、肝心の本を取り落としそうになり、お釣りを渡そうとした時、ふと手と手が触れそうになつて——真つ赤になつて硬直してしまい。

さんざん妙な顔をされながら、どうにか小鈴はニッ岩明神に画書を手渡した。

「ど、どうぞ」

「有り難い。いや、こんなに易く良いものが見つかると思つて

おらなんだよ」

掘り出し物を手に入れて上機嫌のニッ岩明神。

格子模様のマフラーを巻き直し、背を向ける彼女に、おもわず小鈴は声をかけていた。

「あ……あのっ！」

「ん？ どうかしたかの、」

怪訝な顔をして振り返る彼女の長い髪から、ふわりと香る白梅の匂いに——小鈴はエプロンの胸元をきつく握り締めていた。

昨日は、どこにいたんですか——

どこかの子と、寝ていたんですか。喉元まで出掛かった、醜い言葉をすんでのところで飲み込んで。

「あ、……ありがとうございます！」

「……………ん。世話になつたの」

無理繰りに営業用の笑顔を繕い、小鈴はニッ岩明神の帰りを見送つた。



「……小鈴、本気なの？」

「お願い琴さんっ、どうしてもやらなくちゃいけないの！」

頭を下げる小鈴に、髪結いの琴は胡乱な顔をする。彼女は小鈴の二つ上の娘で、親を流行病で亡くし天涯孤独となつて、自ら三条小路に乗り込んだという経歴を持つ豪の者であつた。

宵町の外でも仕事をしている彼女が出てくるところを見計らい、

小鈴は一世一代の賭けに出た。伝手を頼って、遊郭に忍び込ませて貰えないかというのである。

思い余ったにしては勇み足の過ぎる手法であつたが、思いつめた様子の小鈴に、琴は驚きながらも応じてくれた。

「……そこまで言うならよっぽどの事情なんだろうけど、あんまりお勧めはしないよ？　そこで働いてる私が言うのもなんだけど、堅気の娘には刺激の強いところだと思うし」

「ごめんなさい！　どうしても事情があつて……。他に頼れる人なんていないの。迷惑なのは分かっているけど、お願いっ」

鈴奈庵には、遊女が客の伝手から珍本を求めて使いをよこすこともある。また、遊郭に住む下働きの娘たちの中には、字を覚えるため小鈴の読み聞かせに通ってくる者たちもいる。琴もそんな経緯で知り合った一人なのだ。

深く頭を下げ、ひたすらに頼み込む。相手の弱みに付け込むよううで気が引けるが、小鈴にも譲れないことだった。じつと動かない小鈴に、しばらく難しい顔をしていた琴だったが——やがて腰に手を当てて大きく吐息。手のかかる妹のわがまを聞くようにに毗を下げて、

「……まあ、しょうがないか。小鈴の頼みだしね。ウチの店、旦那も適当だし、見ない顔の娘が連れてこられるのもしょっちゅうだし、何日かくらいなら誤魔化せるでしょ」

「ありがとう、琴！」

小鈴はばあ顔と顔を輝かせ、琴の手をぎゅっと握って感謝を示す。相談の結果、小鈴は下働きの童女として忍びこむことになった。支度もあるため日を改めて、宵町近くの髪結い処で合流する。

いよいよやってきた機会に意気込む小鈴に、琴はじつとその装

いを上から下まで厳しい目線で品定めし、辛辣な意見を告げた。「まずその格好じや駄目よ。客引きも小間使いも棒杭じやないから、そんな色気のない有様じゃすぐに気付かれちゃう」

「い、いろいろって」

これでも宵町に違和感のない格好で来たつもりなのだけど、とたじろぐ小鈴に、琴は指を立てずいと言め寄る。

「大事なことよ。小鈴くらいの娘だつてお店には出ているけど、そういう子は大体何か事情があるもんだし。もう何年もこの商売やつてますつてふてぶてしい位じやなきや怪しまれるわ。今日明日お店に出て、すぐにお目当てさんが来るとも限らないし。何日かは居続けになると思うけど、平気？」

「う、うん。なんとかかなると思う」

阿求に古書の解説を頼まれて、何日か泊まり込みで作業をしなければならなくなつたとか、そのあたりで誤魔化すつもりでいた。

「そつか。じゃあ——あ、小鈴、髪ほどこよ？」

小鈴の後ろに立った琴は、左右に括られた栗毛をほどこき、櫛を通してゆく。髪止めの飾り鈴を渡され、小鈴は琴の手慣れた指先を見つめていた。手に職を付け、一人宵町で逞しく生きている彼女への、素直な称賛が起こる。

「そう言えば小鈴、男の人の相手つてしたことあるの？」

「あ、相手つてっ」

思わず絶句し、むせる小鈴。それで琴は察したらしい。

「ああ、まだなんだね」

「……そ、そんなことないですよ経験豊富ですしっ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……ごめんなさい。ない、です……」

本職の前で見栄を張るといふかなり微妙なことをした小鈴だが、思いやるような琴の笑顔に耐えられなくなり、ずるずると落ち込みながら、素直に本当のことを言った。

「恥ずかしがることじゃないよ。大事なものなんだから」

達観した雰囲気のある琴に言われ、小鈴は居たたまれない気分でする所行きの袖を握り締める。

「……まあ、お手伝いなら無理にお客を取らされることもないはずなんです。たまに、そういう子の方がいいって客もいるからねえ」

「そ、そういう子って……その」

「需要の問題なんですけどね。初ものはどうであれ有り難がられるのよ。男って馬鹿だからねえ。あんな店にまで来ておいて何言ってるのって感じだけども。……あ、顔こっち向けて？ ……ん、よし。はい、できた」

気付けば、鏡台の奥にはいつも左右に括っていた髪をほどき、後ろにひとつにまとめて結いあげ、金細工の簪を通して。

眉を整え、頬にも白粉を薄くはたき、頬と唇にも薄く紅を乗せて。見違えるくらいに色気を増した自分の顔があった。

「……おお」

驚きのままに瞬きを繰り返して、首をゆつくりと左右に巡らせる。なんとも言えない姿になった自分が、鏡の向こうで同じ動作をした。素直に言えどもにも背伸びしている感はないが——それでも、鏡の中の小鈴は、夜町に出入りしても不自然に思われないくらいの顔となっていた。

「で、服はこれね」

琴の換えであるらしい打掛け——仕掛けと呼ぶらしい——を渡され、小鈴はそれに恐る恐る袖を通して。前帯の上に裾が大きく割られており、重ねた襦袢が覗くと共に、胸元も大きく開けられたものだ。これでお手伝いの衣装ということはお座敷に上がる娘たちはいったいどんなものを身につけているのか。

「うーん。胸のところちよつときびしいなあ」

非常に気になる物言いだったけれど、度壺にはまりそうなので反論は吞みこんでおく。胸元に詰め物を入れて帯を膨らまし、花飾りと簪を揃えて。一通りを終えた頃には、一端の夜の装いをした娘がいた。

「小間使いって言っても、ちゃんとした格好じゃなきゃお座敷には出して貰えないしね。……いちおう、その格好ならそんなに困ったお客さんは来ないと思うけど」

簪や帯など、小鈴の格好は、まだ客を取ったことのない下働きの娘を示すものであるらしい。一通り、宵町での作法を説明してから、琴は小鈴を連れて店を出た。

二人連れ立って大通りを抜け、宵町の門を潜る。

緊張する小鈴をよそに、門番はやる気無げに琴の示した割符を確認すると、すんなり二人を通してくれた。拍子抜けする小鈴だが、ここからが本番だと気を引き締める。

「うわあ……」

門の向こう、朱と灯りに彩られた宵町は、まばゆいばかりにきらびやかであると同時に、ひどく退廃的な気配も漂わせていた。道ゆく人々はみな美しく着飾り、夜の装いを露わにしている。朱塗りの格子の向こうから客を招く花魁に声をかけられ、小鈴は驚

いて声を上げそうになってしまう。

路地の隅では月阿片らしき煙を燻らせている花魁の姿や、薄闇の中で人目も気にせず絡み合う影もあり、ここが門の外とは違う世界であることを感じさせる。

異界の気配に飲まれかけながら、小鈴は琴に先導されるまま、裏路地を回り込んで一軒の店へと上がる。『弁天』という看板を掲げるこの店が、琴の働く店だ。

裏口に入るや否や、片目に向こう傷、指の二本足りない、ごつい男がじろりと二人を見る。「戻りました」

「おう、琴、早くしな」

男がぶつきらぼうに顎をしゃくって奥を示す。

(ほら小鈴、落ち着いて)

(だ、だいじようぶつ、平気よ)

ぎこちない会釈だけをして、小鈴は早速に琴を追いかけた。

幸いというか、見知らぬ娘が急にやってくること自体はよくある話のようで、ほかの娘や店の者たちから小鈴が咎められることはなかった。寒風の吹きぬける狭い廊下を抜け、どうにか支度部屋までたどり着いて、小鈴はほっと胸をなでおろす。

「えっと、私、お客さんみたいだから先に行くけど——気を付けてね。ヘンな事言われたらちゃんと断って。他の子に助けて貰ったついでいいから。……念のため繰り返すけど、普通の子には危ない場所なんだからね」

「う、うん」

親切心からなのだろう。琴の再度の念押しに小鈴も神妙に頷く。

「それと、旦那やおばさんたちに雑用とかたくさん申しつけられるかもだけど、その時はちゃんと手伝ってね。大丈夫、堂々とし

てればバレないから。小鈴可愛いし、怪しまれたって、ふてぶてしく行くくらいで丁度いいと思う」

「……わかった」

神妙にうなずく小鈴に、琴はよしとばかりに微笑んだ。

「でも、小鈴、そこまでして逢いたいのか？ 二ッ岩明神さんに「え」

突然に聞かれ、小鈴はかあと頬が熱くなるのを押さえられなかった。不意打ちに俯いてしまった小鈴に、琴はにんまりと笑顔を見せ、ぽんと小鈴の背中を叩く。

「そういうことね、うまくやりなよ」

「な、なんか誤解されてる気がつ」

訂正をしようとした時、階下からの声。指名の入った客から琴を急かすよう呼ばれていることを知らせるものであった。

じゃあね、と手を振り、琴は足早に部屋を出ていく。

「あ……」

襖が占められ、小鈴はぼつんとその場に取り残される。不意に喧騒が遠くなり、部屋にひとり置いて行かれた、普段とはまるで違う装いをした自分。改めて自分の姿を見降ろし、急速に頭の中が冷えていく。冷静に考えて、とんでもない勇み足をしてしまっているのではないかという不安が、今更のように押し寄せてきた。

「……ちよいと、ちよいと、あんただよあんた！」

そんな感傷を吹き飛ばすかのように、どたどたとした足音が響く。襖をがらりと開け現れたのは、なよなよとした琴囲気の男だった。年のころは五十すぎ。てかてかとした鼻の頭が妙に目立つ。剃っているのだろうか、つるりとした頭を撫で、甲高い声で小鈴を呼び付ける。

「ほらほら、そんなところでサボってるんじゃないよ！」

まったく、とやけに女性じみた仕草で顎を撫で、男は眉を跳ねあげ、まじまじと小鈴の顔を覗き込んだ。

「ん？ ……なんだい、見ない顔だね？」

「え、あ、あのつ、昨日——そう！ 昨日、来たばかりで、良く分からなくて——」

「なんだい。新顔の子かい。竹蔵の奴、まああたしに紹介しないで勝手なことを——ああ、そんな事言ってる場合じゃないんだよ、今は猫の手も足りないくらいなんだ、早くこつちに来て手伝いな！」

男に言われるまま、小鈴は慌ててその後を追った。最初に通された裏口とはまるで違い、店は夜の装いへと変わっており、そこここに蜜蝋が火を灯している。揺らめく炎と甘い香りの中、寂れたあばら屋は、荘厳な御殿へと姿を変えていた。

(……すこい)

男はどうやら、この店の主人——琴が旦那と呼んでいた人物らしかった。強面の男たちや水場で働く老婆たちに次々と声を飛ばし、着飾った娘たちを追いつけるように奥へと押しやる。

小鈴は彼に連れられるまま、忙しなく従業員が行き来する水場を通り抜け、店の二階へと連れて行かれた。

「じゃあ、あんたはここだよ。次のお客が来る前にここを片しておいておくれ、終わったら隣もだよ。いいね！」

小鈴が押し込められたのは、座敷と続くになる、金欄屏風に行燈の部屋だった。中はまだ暖かく、ほんのついさっきまで人がいたのは明らかだ。

見れば柔らかな布団が大きく乱れ、二つ並んだ枕が乱れて

いる。布団の掛け布はきつく掴んだ指の痕に、枕の片方には、声を殺して噛みついたような跡までついている。

「……っ!？」

そこでさっきまで何が行われていたのかは、すぐに小鈴にも察することが出来た。少女の首から耳までが見る間に赤く染まる。

(ひゃああ……こ、これ、そういう、こと、よね……?)

思わず顔を覆った指の隙間から、恐る恐る室内を眺める。揺れる蜜蝋の灯り、馥郁と立ち上る白梅の香の中、丸められた柔らかな懷紙と、白いシーツに転々とこぼれ滲む染み。乱れた布団の上で絡まり合った肢体が目に見えぬように浮かぶかのようだ。

色濃く残る香の残り香にまじって淫靡な気配が籠り、ここで行われていたかをありありと想起させるに十分であった。

「……………」

思わずこくりと息を呑み、後ずさった小鈴の背中が、隣の部屋とを隔てる襖にぶつかつた。薄く明いた襖の隙間から、かすかな物音と声が聞こえてくる。

「やあ……そんな、がつついちゃ嫌よう……んう……」

絹擦れの音に混じり、熱く濡れた唇を塞ぐ、熱っぽい湿り気の音。肌と肌が重なって奏でられる睦み合いの物音が響いてくる。

ぎし、ぎし、と畳が軋む音に合わせ、少女の甘い声が昇り詰めるように高まってゆく。がた、どき、と折り重なる身体が絡み合う物音まではつきりと聞こえた。

(……え、う、あ……っ)

可愛らしい声が高く跳ね、一夜の恋の相手を求めるように男の名が呼ばれる。

これまで、できるだけはつきりと意識しないようにしていた事

実が、小鈴の頭をいっばいにした、ここが何のための場所なのかを思い知らされ、小鈴は真つ赤になつて動けなくなつてしまふ。

ここは『そういうコト』をする為の場所なのである。

自分の装いもそうだ。美しく飾つた何もかもが一夜の恋のためにあるものだ。

響いてくる物音にそつと視線を向ければ、薄く開いた襖の向こう、まだ座敷の上だと言ふのに絡み合う男女の姿がある、着物ははだけた娘が小さな乳房も露わに、白い肌を見せて下から男に突き上げられ、腰を抱えあげられて、あ、あと高い声を上げている。

「…………ふえっ?!」

思わず叫びそうになつた口を塞ぐ。他人のそういう姿を直接、目の当たりにしたのは、これが初めてだった。いやらしく絡み合う足と足。繋ぎ合わされた手と手。腰を掴まれ突き上げられる娘の奥深くに、熱い滾りが打ち込まれる。

否。ここだけには限らない。この部屋の回りでも、同じような光景が繰り広げられているに違いなかった。

ひよつとすると、今度は、琴も同じように――

さつきまで友人のように話していた相手が、いまは見たこともないくらいに陶醉した表情で、男に組み敷かれ、白い喉を反らせて、身体の内側に雄の滾りを受け止めている。

柔らかな布団の上、頬を染め、目を潤ませた彼女が、男の腰にそつと足を絡め――

(だ、だめ!)

それ以上考えていてはならない。反射的に頭を振つて、小鈴はそこから先の想像を振り払つた。頭の芯が疼くように熱い。ぐるぐると思考が煮詰まり、三方の襖から離れられずに、小鈴はべた

んと布団の上に尻餅をついてしまった。

ついさつきまで、誰かが客を取つていた、寝具の上に。

ぞくりと身体の奥を這い上る感覚に、小鈴が小さく身を震わせた瞬間――

「ちよいと」

「ひやあああ!」

いきなり空いた襖に、小鈴は悲鳴を上げていた。身の危険を感じ、思わず手近にあつた枕を襖の向こうめがけて投げつける。

「ぶっ!!」

枕は見事、男の顔面に命中する。鼻頭を押さえて涙眼になつてゐるのは、先ほどの主人である。

「あ痛たたた……な、なにすんだいっ藪から棒に!」

「ごっつ、ごめんなさいっ、ごめんなさいっ!」

平謝りになつて頭を下げる小鈴に、男は不機嫌そうに赤くなつた鼻を擦り、

「ああもうまったく……なんだい、馬鹿みたいに大声出して。お客様にご迷惑じゃないかい。

……ちよいと、手が開いてんなら来て頂戴よ。御最前様が来たつてのにだあれも来やしないんだよ。……まったくねえ、何やつてんだかね竹蔵の奴は。ほれ、そこは良いからあんたも早く来るんだよ」

「え、でもまだその、片付けが……」

「そんなのはあとでも良いんだよ! 失礼があつちやまずいからね、くれぐれも氣を使つてご挨拶するんだよ」

ぐいと手を掴まれ、小鈴は廊下へと引つ張り出される。随分急いでいる様子の主人に、一体誰が来たのかと聞けば、主

人は当然だろうという顔をして答えた。

「何トンチキなこと言ってるんだい、二ッ岩明神さんに決まってるじゃないか！」



急かされるまま、小鈴が向かったのは、店の三階の一番奥。弁天でも一番上等な座敷であつた。他に誰も上げている様子もない、特上の部屋であるらしい。

二ッ岩明神——まさか、初日にいきなり遭遇することになるなんて。目的はあつたりと果たされることになる訳だが、何故だかとてもない方向に話が進んでいるような気がしてならなかった。

「あ、あのあのっ」

「ん？ なんだいもう」

先を行く主人を呼び止め、小鈴は思わず訊いてしまう。

「あ、あの、え、ええと。……二ッ岩明神さんが、最顶层にされている、お姐様って……いらつしやるんでしょうか？」

「ん？ ああ、そうだねエ、いつも朝霧太夫か夕露太夫に出て貰つてるけど、特段のご指名はないねえ、その点、やれあいつを出せこいつじゃなきゃ嫌だと我儘を通そうなんて煩いお客とは違つてやりやすいのは有り難いよウ、本当に」

眉をしかめ、答える主人。

二ッ岩明神が特定の相手をいつも指名しているのではないと聞いて、小鈴は安堵の笑みを浮かべる。

「つて、なにほっとしてるの、私ってば」

「ああもう、今はそんなこたあいいんだよ、ほら、お膳はどうし

たんだよウ！」

「は、はい！」

急かされて三階の座敷へ入れば、既に小鈴の想い人は奥の部屋に既に腰を下ろし、いつもの様子でゆうゆうと煙管を吹かしていた。大分くつろいだ様子で、通い慣れているというのは本当のことらしい。

「あ……」

いつもの羽織に丸眼鏡。こんな場所でも普段とまるで変わることもない様子に、ふと小鈴の胸が軽くなった。正直、心細かったところに見覚えのある姿を見つけて、そのまま駆け出してしまいたくなつたくらいだ。ほつと胸をなでおろす小鈴の隣で、主人はずいとその前に進み出て、ぺちんと禿頭を撫でた。

「いやあ、こりゃあようこそで御座いますよウ、二ッ岩明神様、まったく揃いも揃つて皆不器量ばかりで、お待たせしましたよウ」

「かつかつか。繁盛結構、賑やかで良いことじゃないかね。色町はこれくらい騒がしい方が好みじゃよ。自分以外に客が居らん方が辛気臭からう？」

「参りましたねエ、そりゃごもつともですよウ」

ぴしゃりと禿げた額を叩き、猫撫で声でおべつかを並べ始める主人。

先程芸子達を前に偉そうに指図していた時とは打って変わつて、調子のいい向上を並べ立てる様子は、とりもなおさず二ッ岩明神の立場がよっぽどのものであることを示していた。

「まったく、折角の明神さんのお越しだったのに、お待たせしてばかりで本当にどうしようもない……ちよいを気を回すくらいで

きないでまったくもう、あとで竹蔵のやつにはあたしのほうからきつーく言っておきますからねエ、なにとぞ、勘弁を」

「いんや、儂が横車を押すなどそれこそ不法法というもの。ついふらりといひ音色に誘われてしまったからのう。押しかけてしまったのは儂の方じや、今夜は一休みできれば良いよ」

どうも、彼女に引き合わせるのに釣り合う太夫が、皆たまたま出払っているらしい。琴に聞いた限りでは、こうおう場合、客はその夜はどれだけ遅くまで待っていて、目当ての太夫に会う事はできないようになっていくという。相手をしていた娘の身が開いてもだ。

たとえ遊郭といえども女はモノではなく、宵町なりの作法があり、きちんと心を交わすための手続きがある。琴の言うには、上等な店ほどそうした所作を大事にするのだということだった。

「しかしそうも言ってられないですよウ。なにより明神さんを退屈させたあつちや、三条小路でも笑いものですからねエ。」

……ほら、なにしてんだい、ぼーっとしてないで早く明神さんのお相手をしてやんな！ 愚図だねえ！ ああもう、まったくねえ、気の付かない娘で参りますわ」

ぺこぺこする主人に強く背中を押され、小鈴は慌てて二ッ岩明神の前に進み出た。

「す…鈴と申しますっ」

咄嗟に、偽名とも言えない源氏名を名乗り、見よう見まねで三つ指を突き、深々と頭を下げる。

（だ、大丈夫……気付かれて、ないはず……）

鈴奈庵の看板娘が遊郭で春をひさいで居たなんて、醜聞どころの話ではない。ちよつとでも外に漏れ聞こえれば、小鈴は明日か

ら外に出ることもできなくなってしまう。

そのためにも琴に頼んで念入りに装つてもらったのだ。……そう簡単にばれないだろうと聞き直るくらいしか、小鈴に出来ることはなかった。

（そうよ、私がここに居るなんて、明神さんだつて思つてないはずだし！）

半分自棄になつて自分に言い聞かせ、小鈴はかちこちになりながら二ッ岩明神の傍に腰を下ろした。どう見ても夜の蝶とは言えないぎこちなさで酌をする。

「し、失礼しますっ」

「……うむ」

しかしそんな様子も、却つて二ッ岩明神の関心を引いたらしい。二ッ岩明神は機嫌よく小鈴の杯を受け、ぐいと飲み干した。すぐ間近で酒精の滴を舐める二ッ岩明神の、ほんのりと紅い唇が満足げに緩められる。朱の杯を干す粋な仕草に、小鈴の胸が訳もなく高鳴る。

「……ふむ。可愛らしい子じやなあ」

素直に容姿を褒められ、小鈴の胸はどきりと高鳴った。家族以外の誰かにこんな風に言つて貰つたことなんて、七五三の時以来だろうか。舞い上がりそうになる自分を抑えるので精一杯だ。

「おぬしも一献、どうかね？」

「あ、はい、いただきますっ」

この流れで断るわけにもいかない。小鈴は二ッ岩明神から杯を受け取り、なみなみと注がれた酒精に口を付けた。

「……ん」

お酒は初めてではないが、賓客のためによほど上等な酒精を用

意しているのか、その風味はいつもよりも大分強く感じられた。

こくり。目をつぶって杯を開ける。白い喉を滑り降りる酒精は胃の腑の奥でかあつと燃え上がるようだった。

同じ杯を使い回しているせいか、酔いの回りがやけに早い。ぽおつと頬が火照り、装束の内側にしつとりと汗が滲む。決して小鈴も酒には弱くはないはずだが――

「ふあ……」

重ねた杯から口を離すと、思わず吐息がこぼれた。くらりと視界が揺れ、小鈴は慌てて姿勢を戻そうとする。

「おや、あまり酒は強くないようじゃなあ」

「い、いえ、大丈夫れすっ」

強がつて見えるが、いくら背筋をピンと伸ばそうとしてもふらふらと揺れ、頭の芯までぽおつと熱くてぼんやりとするばかりだ。ふらりと倒れ込んでしまった先、二ツ岩明神に身体を支えられ、小鈴はますます顔を紅くした。

「なんだいだらしなないねエ……明神さんに迷惑をお掛けするんじゃないよ」

「いや、構わん構わん。飲み比べも嫌いじゃないが、こう可愛らしく酔うのじゃったらのう」

主人は小鈴を叱ろうとするが、くすくすと微笑む二ツ岩明神に見つめられ、もはや小鈴は言葉もなかった。

真つ赤になつて俯いた小鈴を傍らに、明神は機嫌よく主人にも酒を振舞う。ようやく遅ればせながら膳の続きも運ばれてきて、本格的に酒宴が始まった。いったいどこから取り寄せたものか、新鮮な海の幸が山と並べられていた。

奥座敷というだけあって、周囲の物音や喧騒などが漏れ聞こえ

るような粗末な作りではないようだが、遠く華やかな通りの賑わいは仄かに届いていた。姐さんの三味線に合わせてはしゃぐ客と芸子。夜の町に響く喧騒は、とても同じ人里とは思えず、どこか遠い異国に迷い込んでしまったような錯覚すら覚える。

どこかの座敷で芸妓遊びでも始まったか、きやあきやあという声が上がりは始める。ふと小鈴は顔を上げた。主人のおべつかをよそに、穏やかなレンズ越しの視線が小鈴を見つめる。

「……………」

酔いの回つた頭の中、さっきの個室の隣で繰り広げられていた淫靡な姿が思い起こされる。

もうだいぶ夜も遅い。二ツ岩明神が腰を上げる気配はなく、宴も途切れる様子はない。となれば、彼女がこのままここで一夜を明かすことは間違いないのだろう。

とすると、そのうち誰かがここに呼ばれてきて、二ツ岩明神のお相手を務めるのだろうか。それを想像すると、小鈴の胸にはちくりと棘が刺さつたような痛みがある。

(そんなの……嫌)

盛り上がる主人と二ツ岩明神をよそに、小鈴の心は沈むばかりだった。

我儘なのは分かっている、そんなものは見たくない。酔っているせいか、素直に小鈴はそれを認めることが出来た。できることなら――このまま何事もなく、店を出ていつて欲しい。叶わないだろうと知りつつも、小鈴はそう願わずにはいられない。

「いやですよ、明神さんつてば御世辞ばかり……」

「なあに、本当のことじやて。おぬしにはだいぶん世話になつておるからのう」

「そんな、勿体ない。無作法ばかりでお恥ずかしいくらいです。……本当ねえ、今日はこんなむさくるしい親父の話に付き合つてまで頂いて、もうねえ、あたしや感謝しきりですよ」

色町の商売に關してあれこれと、難しい話が一段落したところで、主人は細い指で顎を触り、ずいといと二ツ岩明神の傍に近付く。ちらりと横目で小鈴の方を窺つてから、広げた扇子の裏に声を潜めるようにして。

「……ねエ、二ツ岩明神さん、モノは相談で御座いますがねえ」「うむ?」

「足労の上で、大変失礼かと思ひますけれど、……この子の水揚げをしてもらう訳にやいけませんかねエ?」

「ふうむ」

きらりと、二ツ岩明神の眼鏡が光つた——ように、小鈴には見えた。え、と首を傾げる小鈴をよそに、主人は大袈裟に首を振り、

「なにしろ、いつまでも垢抜けない娘でねエ。見ての通りちんちくりんで、碌なご量も居ないと来てますでしょう。……ここはひとつ、明神さんに可愛がつて頂けるなら、良い御縁になるんじゃないかつて、あたしは考えてましてねエ。」

「ふむ。……そりや構わんが、良いのかの?」

「勿論ですよウ。こんな良い話、なかなかあるもんじゃありませんもの。……いいね、*「鈴」*?」

「え、……あ、はい」

いきなり話を振られ、小鈴は迫られるままに勢いで頷いてしまふ。それを見、主人は満足そうにうんうんと頷いた。

「そうかい、良かった。それじゃあ良くして貰うんだよ、失礼のないようにね。さて明神さん、そろそろ邪魔な親父は退散します

よウ、どうぞごゆつくり」

それだけ言うと、主人は隣の部屋の襖を開け、そのまますると座敷を後にしてしまつた。

「……え?」

いきなり座敷に取り残され、小鈴は呆然とあたりを見回す。何かなにやら分らないでいるうちに、二人の間で話がまとまつてしまつたらしい。

しかし説明もなくいきなり二人きりにされてしまい、小鈴はおろろと部屋の中を見回した。二ツ岩明神とは言へば、取り出した煙管に火を入れて、鼻歌交じりに紫煙をくゆらせている。

どうすればいいのかと思ひながら、小鈴は身を傾け、主人の開けていつた襖の向こうを覗き込んだ。

そこには錦の金屏風の下、見事な一組の寢具に、枕が二つ。

「——はい?」

その光景の意味が分からず、小鈴は目を擦つた。思わず腰を上げて、部屋の奥をまじまじと覗きこんでしまふ。しかし何度瞬きをしても、備えられているものは変わらない。

(え、おふとんが一组で……つてことは、ここがその、そういうお部屋? でも、えつと……え? え?)

混乱する頭は、うまく思考をまとめてくれない。ここに至つてようやく、小鈴は自分が相当まずい状態にあることに気づきはじめていた。

ここがどういふ場所かは、今さら言うまでもない。そこで客と二人きりで残され、ごゆつくり、失礼のないように——と、いうことは、つまり。

(ええええええええええええええええッ!?)

これから二ッ岩明神はここで『お楽しみ』であり。

その相手を務めるのは、小鈴である、ということであろう。

(ちよ、ちよと待つて!? は、話が違ふよおつ!?)

琴はそんな事、言っていないかったのに——声にならない抗議を叫ぶ小鈴だが、無論応えてくれる相手はいない。

……結論から言つて、見習いであればお客は取らせないというのは確かに正しい。しかしそんな見習いであつても、宵町に生きる娘である以上、いずれは座敷に上がり、客を取らねばならないのだ。そんな見習いに初めて客を取らせることを、初めて船を海に浮かべる事になぞらえて水揚げと呼ぶ。

主人としては、けして器量の悪くもない小鈴が、ずっと遊女見習いとして客も取れず、売れ残つてゐる状態は宜しくないと考えていたのだ。

早くお得意様を見つけるのは、遊女として生きてゆくために必須である。そこで、遊女見習いの『鈴』の水揚げを、もつとも大事な最良である二ッ岩明神に頼んだのである。

「……ん、どうかしたのかの」

「ひやあつ!？」

お布団一組を前に呆然としてゐる小鈴のすぐ後ろに、にこにこと笑顔の二ッ岩明神が立つてゐた。ちょうど逃げ道を塞がれた格好になり、小鈴は困惑する。

「あ、え、いえ、そのつ」

あまりの急展開に舌がもつれ、言葉がまとまらない。

ここは遊郭であり、彼女は正當な手続きを踏んだ客だ。二ッ岩明神としては小鈴を抱くことは当然のことであり、拒否などできない。不作法をしたというのでなければ、小鈴自身に相手を断る

権限はないのである。

「え、つと……え、あ……う」

ここまでしておいてまさか今更、貸本屋の小鈴でしたと名乗る訳にもいかず、言葉に詰まつた小鈴を——二ッ岩明神はひよいと抱えあげた。

「きやあ!？」

「うむ。初心な反応じゃなあ。新鮮で良いのお♪」

据え膳の『初物』にすっかり上機嫌な様子の二ッ岩明神。強く抵抗することもできず、小鈴は夜具の上に降ろされてしまう。柔らかな布団の上、否が応でも自分が組板の上の鯉であることを意識させられ、小鈴の頬は一気に熱くなる。

「……ふむ、何か不都合でもあるのかの?」

「え、あつ、そのつ」

「では、よかる」

くすりと、あの、いつもの悪戯っぽい笑顔。ふと見とれた瞬間に、小鈴は口を塞がれていた。

くいと顎を持ち上げられ、唾液をまぶした暖かな舌でたつぷりと口内をまさぐられる。巧みな動きで唇を噛み、歯の裏までを探られる。情熱的な口付けは、昔、阿求とふざけて試してみた時のものとはぜんぜん違つていて——気付けば意識までぼろと飛んでいた。

「……ふあ。……」

舌先を吸われ、前歯に甘く噛まれて——大人のキスに、ぴりぴりと頭の芯までが痺れるよう。ゆつくり唇を離されれば、とろんとした視線の先につつと涎が糸を引く。

「あ……」

思わず口元を押さえ、小鈴は頭から湯気を噴き出しそうになる。
「おや、口吸いは嫌じゃったかの」

「あ、あの、ち、ちが」

嫌という訳では、ないはずだ。はしたない話だけど、もつと先まで想像してみたことだって、ある。

でも、でも、こんな形で、本当に——？

そんな戸惑いすらも初心な反応と捉えられ、小鈴は身体ごと引き寄せられていた。二ッ岩明神は小柄な小鈴の腰を抱え、鮮やかな手つきで帯を緩め、するりとその内側に手を滑り込ませてくる。上掛けの下に潜り込んだ温かい手のひらは、とてもいやらしい手つきをしていた。

これがごつい手触りの節くれだった男の手であれば、怖気も走ろうというものだろうが——二ッ岩明神の細く滑らかな指は、古書を扱う手のように、まるでそんなものを感じさせない。少女の抵抗は泡のように溶け、気付けば肌掛けまで脱がされていた。

「あ……っ」

露わにされた慎ましやかな胸に、二ッ岩明神はそつと顔をうずめてきた。敏感な肌を感じる息遣いに、小鈴は思わず息を詰める。つう、と熱い舌が肌をなぞると、たちまちそこから蕩けるような火照りが広がってゆく。

このひとは、ほんとうに、こういうことをするのだ——と。乱れる息の中で、小鈴はぼんやりと思う。

（わたし、これ……こんな……の、っ）

不安と困惑に心がかき混ぜられ、拒絶と許容の境目すら曖昧になつてゆく。きゅんと締め付けられる胸の奥に、小鈴は抗えない。

小さな乳房のふくらみを慈しむように弄び、酒精でほんのりと

色付いた膨らみの先端、つんと尖った先端をそつとこねる。二ッ岩明神の巧みな指使いに、緊張を浮かべさせていた小鈴の肌に汗が浮かび、強張りはすぐにほどけていく。

「んっ、や……ッ」

拒絶すらも鼻にかかった甘い声。反射的に身をよじる小鈴を巧みに捕まえて、二ッ岩明神は離さない。再び唇を甘く塞がれ、馴染んだ舌先に熱い舌を交わらせる。淫らに絡み合う舌先に、頭の奥がじんと痺れる。

「ふあ……っ」

詰めていた息を吐くと同時に、今度ははむりと指を咥えられた。人差し指、中指、薬指、丁寧に指の間まで甘噛みと共に舐められ、たつぷりと唾液をまぶされる。

まるで、ゆつくりと、身体の端から食べられてしまっているかのようだ。とろりと濡れた指をゆつくりと口の中で弄ばれ、蕩けた表情を隠せない小鈴に、二ッ岩明神はふむと思案顔。

「……のう、鈴と言ったかの？ おぬし、ここで姉さま方の仕事ぶりを飽きるほど見ておるじやろうに、随分生娘のような反応をするんじゃないか」

「そ、そんな、っ、こと、な、ない、ですっ」

押揃うような二ッ岩明神の指摘に、反射的に言い返してしまふ。(……だめ。き、気付かれ、ない、ように、しなきゃ——っ)

そうだ。いま、ここにいるのは鈴奈庵の小鈴ではない。遊女見習いの鈴なのだ。それに相応しい振る舞いをしなければならぬ。

「まあ、可愛らしくて良いがのお」

くすくすと微笑み、二ッ岩明神は緩んだ帯の下へと手を伸ばしてゆく。下腹をまさぐられ、「だめっ」と反射的に手を伸ばそうと

する自分を、小鈴は必死に制する。

こうして今、二ッ岩明神が自分を抱いてくれるのは、ここに居るのが弃天の遊女見習い、鈴であるからだ。

もし、自分の正体を知られてしまったら——二ッ岩明神は、それでも自分を抱こうとしてくれる、だろうか？

余裕を保とうとする健気な努力の端から、小鈴は巧みな愛部に翻弄されていった。するりと太腿の間に滑り込んだ明神の手が、ふくらはぎ、ひざの後ろ、足の指先を丁寧になぞり、ほどけた帯の下、下腹をそうと滑り降りてゆく。

一体どれほどの娘を相手にしてきたのだろうか。ちりと胸を焦がす嫉妬も長くは続かない。敏感な腿の内側を探られ、弾かれ、小鈴はすぐに甘い声を上げてしまった。

「ひゃん……あッ」

背中に回された指が、肩甲骨を優しくなぞる。ぞくぞくと背筋を這い上る甘い電流が、次々に弾け、少女を妖しく翻弄した。

膝裏、ふくらはぎ、腰骨——小鈴の反応を楽しむかのように、明神の指は執拗なまでに少女の肢体を弄び、小鈴自身も知らなかった感じる場所を探り当て、強弱の波を付けて愛撫する。

ふわふわと天を舞うかのような心地よさに、蕩けた顔の小鈴を覗き込み——

「ふふ、だいぶん気持ちの良さそうな顔をしておるなあ。

——のう、小鈴？」

「ふあ……い……？」

蕩けた頭で、頷いてからしばし。

「……………つつっ?!」

失言に気付いた頭が、一気に冷や水をかぶせられたように危機

感を取り戻した。

「あ、あのあ、あそのつ、わ。わたしべつに小鈴とかじゃないですしありませんのだっ」

胸元を隠すようにはだけた小袖を掻き集め、まったく言い訳になつていない言い訳を並べ立てる小鈴。そんな彼女を見降ろして、呆れたように二ッ岩明神は吐息。小鈴から離れ、呆れ顔で眼鏡を押し上げ、取り出した煙管に火を付けた。

「おぬしまさか、本気でバレたらんと思つとつたのか？」

「あ、あのそのでもっ」

「——まったく、危ないことをするもんじゃなあ。手違いで他の男にでも買われておたらどうするつもりじゃった？ こういう場ではな、たとえ芝居といえども、嫌はないぞ？」

「っ……」

当然の指摘である。俯く小鈴に、二ッ岩明神はぼんぼんとその頭を撫で、努めて明るい声でからからと笑った。

「いやいや、恐がらせてしまつてすまんかったのう。ちよいとだけ脅かすつもりじゃったが、なに、お前さんが相手と知つて妙に気が乗つてしまつての。……無礼は詫びる、この通りじゃよ」

深く頭を下げ、二ッ岩明神は煙管を咥えて煙を吐く。いつも通りの彼女——鈴奈庵で、小鈴を尋ねに来る気のいい商人のそれだ。さつき、身体を重ねていた時の威圧感はどこにも感じられない。

(あ……)

——駄目だ。と。小鈴の胸の中で、囁く声があった。

「……………ます」

「んむ？」

「ちがひ、ます。……人違いですっ」

こくりと緊張を喉奥に飲み込んで。小鈴はぎゅっと二ッ岩明神の袖を掴んだ。潤む目元を堪え、身体をもたげて、明神の唇に口づけた。自分から、そっと——新しい煙草の匂いをさせる彼女の口の中へと、舌を差し入れる。

「んっ……」

からんと、二ッ岩明神の手から煙管が煙草盆に落ちた。懸命に精一杯の背伸びをして、驚きに目を丸くする彼女の舌を吸い、もたれかかるように小さな身を擦り寄せる。

「わ、私、小鈴、なんかじゃ、ありませんっ。……私は、このお店の『鈴』……なんです」

ここは、一夜の恋を結ぶ場所。籠に囚われた娘たちは、外のことなど何もかも忘れて、ただ一度の出会いと情欲に溺れ、言葉の代わりに身体を重ねるのだ。

「至らぬところは、たくさん、ありますけど……ど、どうか、最後まで、お愉しみてください……っ」

言い切る前に、小鈴は耳まで赤くなり俯いてしまった。尻すばみになる口上をじっと黙って聞いていた二ッ岩明神は、深く、深く息を吐いた。

「……そうかい、人違いかの」

「……………」

茹だつたような顔で小さくうなづく小鈴に、二ッ岩明神はほどけた小鈴の髪を梳くように持ち上げて、毛先にそっと口づけた。

「ひゃ、う……」

それだけで声を上げてしまう小鈴。眼鏡の奥で品定めするような視線が、小鈴の心の奥深くを掴む。

「——そういうことなら、遠慮なく頂くとするかの」

瞬間、小鈴は寝具の上に押し倒されていた。いきなりぐいと脚首を掴まれ、襦袢を割られ、緩んだ腰帯まで解かれて。素肌のほとんどを晒してしまう格好だ。

はだけた襦袢の脚が大きく割り広げられ、ひやりと外気を感じる。押し開かれた脚の付け根、大きく乙女の秘所を晒してしまうことに、小鈴の肌は紅潮する。

「や、やめっ」

「おやおや、のう、『鈴』？ この程度、嫌がつておるようではこの仕事は勤まらんじやろうに」

しらじらしく口調を装い、二ッ岩明神は少女の足を抱え込んだ。閉じ合わせていた足の隙間、細いスリットをなぞるように指先が滑り、ほんのりと色付くばかりの幼いつくりの合わせ目を押し広げて、既に潤んでいた柔肉をこねる。

「ひゃう……っ」

小さな口を衝いて出る嬌声。ぬめる指先が色付く淫核を包む鞘を剥き、明神の指が緩急をつけて小鈴の若芽を弾く。ぴんと突かれる度に小鈴は甘く蕩けた声を上げるばかりだった。独り遊びなどとは比べ物にならぬ熱いうねりが、たちまち下腹の奥にせり上がってくる。

小鈴が軽く気を遣うと、すかさず狭い入り口を擦るように指が動き、生硬な乙女の証をほぐすように侵入を試みはじめた。

「ふあ、あ……あ、あ、ツ……ツツ……っ！」

ぬぷりと狭い柔孔に指を押し込まれ、爪の背でくいと若芽を弾かれて。立て続けの衝撃が小鈴の意識を吹き飛ばした。爪先が布団の敷き布を擦るように伸び、ぴんと反り返る。

真っ白な敷布の上にはしたなく蜜を噴きこぼし、がくがくと腰

を震わせ、何度も弓なりに背中を反らす。

「ふや、ああ……んう、あ……ッ」

小鈴は袖を嚙んで声を上げぬようにして——胎内をせり上げるような悦楽の波に耐える。小鈴にだって独り遊びの経験くらいあるが、一人でしている時はどうしたって、辛い時には指が止まってしまうものだ。けれどこうして聞て共にする相手がいる時は、どれだけ気持ちのいい場所を探り当てられても、身動きも取れず身体をずらして逃がすこともできない。

「っ……………!!」

ぎゅうと二ッ岩明神の背中に手を回し、きつく爪を立てて、小鈴は何度も何度も嬌声を上げた。上等な楽器を奏でるかのように、白く細い少女の肢体を、明神の指が責め続ける。

「……………あ、う、は、むっ……………んっ」

「ん、っ」

目元に滲む涙を吸われ、そのまま唇を塞がれた。布団の上に背中が押しつけられ、小鈴の身体は二ッ岩明神に押し包まれる。

「んッ……………ん、んう、んんんう、あ……………ッッ！」

敏感な唇と蜜にぬめる、桃色の乙女の園とを交互に掻き回され、小鈴は塞がれたままの喉を震わせ声にならない叫びを上げた。すっかり馴染み、指を深くまで受け入れるようになった秘所に浅く抜き差しを繰り返して、二ッ岩明神は小鈴に微笑みかける。

「のう、『鈴』」

「は、ひやい、っ」

「おぬし、一応は商売じゃろうに、そんなに何度も気を遣ってしまつて良いのかの？」

面白がるような二ッ岩明神の台詞に、小鈴は懸命に首を振る。

「そ、そんな、ことつ、ない、れふ……………」

「ふむ。その割には随分だらしない顔をしておる様じゃが？」

くすくすと笑いながら顔を覗きこまれ、小鈴は慌てて蕩けた顔を見られまいと、脱げ掛けた袖で顔を覆った。

「やあ……………だめ、顔、みないで、くら、ひやいつ……」

「隠さんでもよかる。可愛らしくて良いと思うがなあ」

呂律の回らぬ舌で答えるも、すぐに甘く唇を吸われ、耳を嚙まれ首筋に舌を這わされ、脹脛やひざの裏、脇の下、薄く浮かぶ肋、可愛らしいお尻まで丁寧に揉まれてしまう。

全身がお湯に浸かったかのように熱い。頭が隅から隅までぼうと熱に浮かされたようで、気持ちいい事以外の何も考えられなくなつてゆく。

不意にくるんと視界が廻ったかと思うと、小鈴は腰を高く抱えられていた。脚の付け根どころかお尻まで、己の全てを曝け出す姿勢だ。

布団の上、二ッ折りにされるように身体を曲げられ、大きく押し開かれた秘所の粘膜に、二ッ岩明神は躊躇いなく口付ける。

「ッひあ……………う、や、っ、だ、だめっ、だめえ……………ッ」

声を上げる間もなく、二ッ岩明神の巧みな舌使いが、桃色に色付く乙女の柔孔をこね回してゆく。身体を中心を唇と熱い舌でまさぐられ、小鈴は何度もはしたなく声をあげ、白い肌を朱に染めて、蜜を吹きこぼした。

前から抱かれて揺さぶられ、背中から抱かれて指を後ろから突きこまれ、抱えあげられ、裏返され。数えきれないくらいの痴態を晒し、どれほど気を遣ったかも分からない。快楽の頂に押し上げられたまま、頭が真っ白になつて蕩けてゆくようだ。

一体何度繰り返されたのか。ようやく解放された小鈴はぐったりと布団の上に突つ伏した。

「は……ふ……」

大きく肩で息をしながら、口元も緩み目も焦点を結ばずに、蕩けた表情で横たわる小鈴の傍で、明神は膝立ちになつてするりと帯をほどいた。

「……さて」

お終いの気配——では、ない。その証拠に、二ツ岩明神の声音は、これまでにない興奮の気色を帯びていた。

「ふふ、少し目を閉じておれ」

「え……」

疑問に思うよりも早く、するりと——突然小鈴の首の後ろから、枕の敷き布がひとりでに持ちあがり、まるで意志ある手のように優しく小鈴の目を塞いだ。

「え、あ、な、なにっ、これ……!?!」

とつさの事に、小鈴は対応できない。目を覆う敷き布を掴もうとするが、するりするりと指の間をすり抜けてしまう。

目隠しを外そうと躍起になつてゐる間に、二ツ岩明神ほどけた小鈴の髪を梳くように持ち上げて左右に括る。

りりん——と。いつもの、真鍮の鈴飾りの音がした。

「え……」

りりん。りんっ。忙しく鳴り響く涼やかな鈴の音が、戸惑う少女を、三条小路の遊郭、『弁天』の鈴から、貸本屋・鈴奈庵の本居小鈴へと引き戻してゆく。

遊女見習いの『鈴』を装うことでどうにか堪えていた、肌を晒し痴態を見せることの羞恥や恐怖が一気に嘖き出し、洪水のよう

に小鈴を押し包んだ。

「や、やだっ……やだ、や、やめ、っ」

「……これは心外じゃな。心ゆくまで愉しめと言つたのは、おぬしではなかったかのう?」

突然——小鈴は、抱え込まれた脚の付け根に、ぐいと押し当てられる硬いものを感じた。剥き出しの股間の中心に押し当てられる熱く脈打つ、杭のようなものが、ゆっくりとなぞるように秘所の上をこねる。

鉄のように冷たくはなく、木のように硬くもない。指よりも太く、固く、遅しく——どくどくと滾る血を感じさせるように熱い。まるで、灼けた鏝のようだ。

「な、なに、なにこれっ、や、やだっ」

『それ』が何であるか——見えずとも小鈴は本能的に感じ取っていた。けれどもがいても不思議と、優しく目を覆われた敷き布は引き剥がせない。暴れる小鈴の耳元で、鈴飾りがりと跳ねる。

「儂を誑かした言葉の責任は取って貰わんなあ」

あくまで軽い口調——けれど、そこには有無を言わせぬ迫力があつた。牙を剥く獯猛な獣のような、底知れぬ迫力と欲望。目隠しで見えない向こうに居る彼女は、小鈴の知らない——二ツ岩明神の本性だとも言うのだろうか。

ぐい、と細い腰を強く掴まれ、引き寄せられる。りりん、と小鈴の髪で鈴がけたたましく跳ねる。

「ッ……!?!」

「のう、小鈴」

深く折り曲げられ、重ねられた肌。布団の上に押し付けられた身体が抱え込まれる。腰を持ち上げられ、力強く脈打ち、滾る灼

熱の感覚がすぐそこに迫っている。
力強く抱き寄せられた耳元に、荒く——まるで、獣のような吐息を感じた。

「——おぬし、儂の子を孕め」

熱い囁きに小鈴が息を飲んだ刹那——
灼熱が、少女の身体を貫いていた。



「——ッ!？」

がばと跳ね起きた小鈴は——見慣れた鈴奈庵のカウンターにいた。いつもの店、いつもの静寂。静かな店内を、柱時計の振子の音がうるさいほどに響いている。

けれど、胸はついさっきまでの光景の続きのように早鐘のように高鳴り、耳の奥で鼓動が響くかのよう。

「おんや、目が覚めたかの」

本棚の前で、本を広げていた二ツ岩明神が顔を上げた。

「え……あ……、私……?」

「随分気持ち良さそうに眠っておったから、起こすに起こせんかったが——どうかしたのかの?」

のんびりと口の端を持ち上げてくすくすと笑う彼女に、頭が付いていかず、小鈴は呆然と店内を見回す。

いつもの通り、いつもの自分の家の、見慣れた書棚。壁の目めくりを見れば、阿求に相談したその日の日付だ。ぼんやりと頭が

重たく、無理な姿勢で寝ていたのか背中も痛む。よつぽじだらしない寝相だったのだろう。頬には涎の跡みである。

(……夢……?)

徐々に落ち着いてゆく鼓動と共に、驚きも治まってゆく。小鈴はぺたんと椅子に腰を下ろした。

「あ、あの……その、なんだか——へんな、夢を」

遊女の真似事をして、二ツ岩明神に抱かれて、最後にはとうとう——思わず口にしかけて、慌てて小鈴は口を噤む。こんなこと言えるわけがない。

そんな小鈴の様子を見て目を細め、二ツ岩明神は本の表紙を閉じ、片目を閉じてくすりと微笑んだ。

「ふむ。……まあ、狸にでも化かされたんじゃないのかのう?」

——とくり。

我知らず、下腹を押さえた小鈴の手のひらの下。
ふいに、熱い感覚が脈打ったような気が、した。

(了)

◆表紙には以下の素材をお借りしました。

http://www.pixiv.net/member_illust.php?mode=medium&illust_id=36505339

http://www.pixiv.net/member_illust.php?mode=medium&illust_id=23183738

【奥付】

「ヨイマチワズライ」

平成25年11月3日

求代目の紅茶会3 内プチオンリー

ビブロフィリアの休日

オルハザカサンバンチ
発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

あかがね
著者 銅 おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の
「東方 project」の二次創作です。





東方project Fanbook 2013.11.3 折葉坂三番地